

「御名のゆえに、御名によって」

ルカの福音書 9:46~51

はじめに

前回は「変貌山の奇蹟」を現わされたイエシュアが、その山を下りられ、直後に一人の子どもにとりついた悪霊を追い出された、という出来事でした。そこには弟子たちでは追い出すことができなかった、弟子たちの業では成せなかったという背景が描かれていました。この事実から神のご計画の完成、成就のためのイエシュアご自身の有用性、必要性が表されていると言えます。私たち人の力や知恵によってではなく、また信仰や祈りによってでもなく、ただイエシュアが天から降りて来られることによって、メシアである主イエシュアの再臨によってのみ神のご計画は成し遂げられ、「神の国」はこの地上に建てられるのです。ここで誤解しないでいただきたいことがあります。私たち教会は日々様々な祈りをしています。主イエシュアの御名によって、その御名の権威を用いて癒やしや解放、力や知恵、平安や祝福を求めて祈っています。その祈りに力がない、意味がないと言っているわけではありません。実際に私たちの信仰生活において祈りが聞かれた、願いが叶えられたことは一度や二度ではないでしょう。私自身もそうですし、私たちの祈りや願いによって、神の奇蹟が起こることは否定しえない事実です。ではなぜ弟子たちの祈りでは悪霊は追い出せなかったのでしょうか。彼らの信仰が、努力が、あるいは聖書知識が足りなかったからでしょうか。そうではありません。述べたように、この箇所において聖書が、イエシュアが表そうとしておられることが「神の国」についてのものだったからです。何度も言うように「神の国」はイエシュアの再臨によって、つまりイエシュアご自身によってのみ成就されるものだからです。その事実、その真理を表すために、ここではあえて弟子たちによって悪霊は追い出されなかったのです。ですから私たちの祈りに力がないわけではありません。しかし私たちが目をとめ、耳を傾けなければならないのは「神の国」であり、それを指し示すイエシュアの、聖書の御言葉です。事実、私たちが日々祈っている願いのすべては、この「神の国」の成就によって叶えられるのですから。

1. 小さい者が偉い

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:46 さて、弟子たちの間で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった。

9:47 しかし、イエスは彼らの心にある考えを知り、一人の子どもの手を取って、自分のそばに立たせ、

9:48 彼らに言われた。「だれでも、このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。あなたがた皆の中で一番小さい者が、一番偉いのです。」

さて弟子たちの間で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がりました。もしこれがイエシュアが悪霊を追い出された、弟子たちにはできず、ただイエシュアだけがこれをなされたという事実を見たその直後であるとすれば、これはなんと愚かな、盲目的な議論でしょう。イエシュアのほかに誰も偉い、偉大なものなどいないと、今しがた彼らはそれを目の当たりにしたばかりだったからです。そのイエシュアを無視

し、自分たちだけで論じ合うこの時の弟子たちの状態ははっきり言って異常であり、愚かにもほどがあります。ここは議論ではなくイエシュアに目をとめ、イエシュアを崇めるべきでしょう。このイエシュアはインマヌエルな御方、すなわち「神が人とともにおられる」という、人々の中に、その間に神が住まわれる、という御名をお持ちなのです。この時の「**弟子たちの間**」にも、イエシュアは確かにおられました。しかし彼らは、彼らの心は「**一番偉い**」最も偉大なお方が、自分たちとともにおられることを度外視し、目をとめてはいませんでした。この様子から今日の教会ではイエシュアの存在よりも自分の順位、自分の価値、自分のことばかり気にして考えて生きる、自己中心的な人々に対する、戒めのメッセージを展開することが多いのですが、神のご計画の視点で捉えるならば、この時の弟子たちの様子は、小さなベツレヘムで生まれ、ガリラヤのナザレ人として生きられた、初臨のイエシュアに対する、当時のユダヤ人たちの反応、応答そのものです。彼らイスラエルの民は、イエシュアの様々な奇蹟を目の当たりにし、その御言葉を聞きながらも、この御方を十字架にかけて殺してしまったのです。しかしそれは彼らが罪深くまた愚かで霊的に無知で盲目であったというだけでなく、イエシュアが一人の貧しいユダヤ人として、小さな存在として現れられたから、ということにもあります。ですからここでイエシュアは一人の小さな子どもを連れて来られ、ご自分のそばに彼を立たせ、これを受け入れるようにと説かれ、ご自身の存在をたとえられたのです。

そしてイエシュアが子どもを連れて来られ、ご自分のそばに立たせた様子が、神のひとり子であるご自分が、その御父と全く同じ立場、同じ視点、同じ考えであり、そこから遣わされた存在であることをも指し示し、たとえておられます。ですからここでイエシュアは「**だれでもわたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです**」と、あえてこのように付け加えられ、あらためて御父の存在を指し示されたのです。つまりここでのイエシュアは御父の「型」、そのそばに立つ子どもは御子イエシュアの「型」として表されたのです。ですから「**あなたがた皆の中で一番小さい者**」とは、イエシュアご自身を指しておられるのです。このように、イエシュアとは、最も小さく、かつ最も偉大な御方なのです。

ヘブル語で「小さい」ことをカートーン(**קטן**)といい、逆に「偉大な、大きい」ことをガードール(**גדול**)といいます。これらの最初の言及を見てください。

創世記【新改訳 2017】

1:14 神は仰せられた。「光る物が天の大空にあれ。昼と夜を分けよ。定められた時々のため、日と年のためのしるしとなれ。

1:15 また天の大空で光る物となり、地の上を照らすようになれ。」すると、そのようになった。

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。**大きい**ほうの光る物には昼を治めさせ、**小さい**ほうの光る物には夜を治めさせた。また星も造られた。

1:17 神はそれらを天の大空に置き、地の上を照らさせ、

1:18 また昼と夜を**治めさせ**、光と闇を**分ける**ようにされた。神はそれを良しと見られた。

1:19 夕があり、朝があった。第四日。

これは神の天地創造の御業の第四日の記述です。「四」という数は、東西南北の「四」方、地の四隅すなわち全地、全世界、そこに生きる全人類を指し示す数です。それを照らす、すなわち「**治め**」る「**光る物**」

とは御子イエシュアを置いて他にはありません。しかしイエシュアはその初臨においては「小さい」光として地上に來られました。確かに多くの奇蹟を行われ、神の御言葉を解き明かされましたが、この世の暗闇、悪しきものをすべて打ち払うほどのものではありませんでした。何よりユダヤ人たちの目には、この光は見えませんでした。しかしやがてイエシュアは再び來られます。その時の輝きはまさにガードール「大きい」偉大な光であり、すべての者がその栄光を見、そしてすべての暗闇が、悪が退けられます。その時イスラエルとこれにつながる異邦人とは、その偉大な光によって照らされ、まさに星のように輝き、数えきれないほどに増え広がる、祝福された民となるのです。このように、上記の記述は、太陽や月や星が造られたというようなものではなく、まことの光であるイエシュアが何をなし、どのような存在となられるのか、そしてイエシュアによって、この御方が支配者、王となられることによって、その民である人々がどのようなのかという「神の国」についての預言が、神のご計画がここにたとえられているのであり、そこに聖書で最初の「小さい」と「大きい」とがあり、それはイエシュアの初臨と再臨を指し示しているということなのです。ですから「一番小さい者が、一番偉いのです」という御言葉にはこのような意味が、神のご計画が秘められているのです。

このように、この箇所は子どものように自分を低くしなさいとか、謙遜でへりくだった考え方をしなさいというような、そのような道徳的な人間の教え、自分への教訓、戒めとして解釈すべきものではありません。そのような解釈をしても、実際にそのような生き方をしようとしても、人は自分の行いによって救われません。救われるべき人はみなイエシュアによって、その御名、その御業によってのみ救われるのです。すなわち、ご自分を小さく、虚しくし、罪がないにもかかわらず、極刑である十字架の死にまで従われ、私たちの罪の贖いを完了された「小さい」光、つまり人々に軽んじられ、無視され、捨てられるほどの「小さい」存在となられた初臨のイエシュア、この御方のその御名、御業を信じ受け入れることです。そして、やがて「大きい」偉大な王として來られ、すべてのこの世の暗闇を打ち払い、選びの民イスラエルとそれにつながるすべての国々の民を救い、そして治め、これを祝福される「神の国」の王、メシアとしての「大きい」偉大な光としてのイエシュアを信じ、その來られる日を待ち望むことによるのみ、人は救われるのです。そのような御方イエシュアを、ただこの御方だけを見つめ、「受け入れるのです」ということをこの箇所は訴えているのです。

2. 受け入れる

またこの「受け入れる」という言葉の意味についてですが、これをヘブル語でカーヴァル(קָבַל)といい、その最初の言及は「二枚の幕にそれぞれ五十個の輪を取り付けて向かい合わせにする」という非常に難解なものとなっています。

出エジプト記【新改訳 2017】

26:1 幕屋を十枚の幕で造らなければならない。

26:3 五枚の幕を互いにつなぎ合わせ、もう五枚の幕も互いにつなぎ合わせる。

26:5 その一枚の幕に五十個の輪を付け、もう一つのつなぎ合わせた幕の端にも五十個の輪を付け、その輪を互いに向かい合わせにする。

26:6 金の留め金を五十個作り、その留め金で幕を互いにつなぎ合わせ、こうして一つの幕屋にする。

五十個の輪と輪を、カーヴァル「互いに向かい合わせに」して、「留め金で幕を互いにつなぎ合わせ」るとは、「こうして一つの幕屋にする」ということには一体どういう意味があるのでしょうか。実はこの「互いに向かい合わせにする」という訳は意識、つまり理解しやすく訳したもののようです。直訳ではこのようになります。「妻として、姉妹としてつなぐ」というような意味になります。この意味から「一人の夫の妻となった姉妹」、カーヴァルはそのような存在を指し示す言葉であるということ。聖書においてそのような存在、人物はアブラハムの子イサクの子ヤコブの妻となった姉妹、レアとラケルのほかにはいません。この姉妹はそれぞれの侍女を用いながらも夫ヤコブ、すなわちイスラエルのために十二人の男の子を産み、それがイスラエルの十二部族となりました。

つまりイエシュアをカーヴァル「受け入れる」とは、イエシュアによってイスラエルの十二部族がみな集められ、つなぎ合わされ、一つの民、一つの家、国とされる、という神のご計画を指し示す御言葉なのです。ちなみに「一枚の幕に五十個の輪」+「もう一つの…幕の端にも五十個の輪」すなわち「百」個の輪、そして「金の留め金を五十個」これらの数が指し示すものは、長さ百キュビト、幅五十キュビトの大きさで作られた幕屋の全体を指し示すものです。神の幕屋とイスラエルの十二部族、これらがイエシュアによって建て上げられる、そのような神のご計画が「わたしを受け入れる人」というイエシュアの御言葉には秘められているのです。この奥義は、ヘブル語でなければ解き明かせない事実です。

3. 味方

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:49 さて、ヨハネが言った。「先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようと思いました。その人が私たちについて来なかったからです。」

9:50 しかし、イエスは彼に言われた。「やめさせてはいけません。あなたがたに反対しない人は、あなたがたの味方です。」

先ほどの箇所には、弟子たちの議論している様子の中にインマヌエルであられるイエシュアをないがしろにし、これをメシアと認めず、受け入れなかったユダヤ人たちの姿が表されていると述べましたが、それに続く上記の箇所には、この弟子たちとは異なる存在が記されています。それは「あなたの名によって」すなわちイエシュアの御名によって「悪霊を追い出している人」と紹介されています（ちなみにここでの弟子たちは追い出せませんでした）。そしてその人は「私たちについて来なかった」ともあります。この場面においての弟子たちの存在はイエシュアが存在を無視し、その光を見なかった霊的に盲目的なユダヤ人たちを表した「型」ですから、その弟子の一人であるヨハネに「やめさせよう」とされる存在、それは今日のユダヤ人とは立場を異にする、私たち教会を指し示しています。実際に私たち教会の祈りは常にイエシュアの御名（イエスの御名）によって祈られ、使徒の働き時代から今日においても、悪霊を追い出し、病を癒し、様々な神の奇蹟を起こしています。しかしそのような教会の多くは、ユダヤ人、イスラエルに対する神のご計画に対して開かれておらず、私たちもまだまだ彼らに対する知識も理解も認識も乏しいと言えます。実際普段の日常でイスラエルを意識することなど皆無に等しいのではないのでしょうか。そのよ

うな私たち教会の姿がここでは「その人が私たちについて来なかった」という御言葉にたとえられているのです。そしてイエシュアはこれを、すなわち私たち教会を敵ではなく「あなたがたの味方」つまりイスラエルの味方、イスラエルにつながる存在であると説いておられるのです。

このように、今日の箇所には①イエシュアの中に御父が、②小さな子の中に初臨と再臨のイエシュアが、③議論していた弟子たちの中にはユダヤ人が、そして④この「あなたの名によって悪霊を追い出している人」には私たち教会の「型」が、それぞれ表されているのです。これら四つの存在によって神のご計画の完成である「神の国」は形成、構成されることが奥義として秘められているのです。

そしてさらにもう一つ、大切なピースが次の箇所に記されています。

4. エルサレム

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:51 さて、天に上げられる日が近づいて来たころのことであった。イエスは御顔をエルサレムに向け、毅然として進んで行かれた。

「エルサレム」。これこそ「神の国」のために選ばれた上記の四つがともに生き、ともに住むために選ばれた場所、聖なる都の名です。「イエスは御顔をエルサレムに向け、毅然として進んで行かれた」とはまさにその重要性、必要性、唯一性を表した御言葉なのです。このように、今日もおイエシュアの御顔は、つまりその御父であられる神の御顔は、少しもブレることなくこの「エルサレム」に向いています。それはもちろん現在のそれではなく、「天に上げられ」たイエシュアが、再び地に来られる時に建てられる「神の国」における「エルサレム」、そしてひいては新しい天と地におけるそれを指しています。このヘブル語表記、イェルーシャーラーイーム(יְרוּשָׁלַיִם?)とは、「神が見る、目指しておられるその完了、完成」という意味です。御父と御子の眼差し、その目標は、その創造の初めからこの「エルサレム」にあるためにこの都にはこのような名が冠されているのです。

今日、あなたの目は何をしていますか？おそらくこの神の目と同じではないでしょう。しかし落ち込む必要はありません。今日の箇所に示されていたとおり、所詮私たち教会は「ついて来なかった」者たちなのです。しかしそのような私たちをも神はお選びになり、恵みとあわれみによってイエシュアの御名を与えてくださいました。そして、自分の力ではついて行けない私たちを、やがて主イエシュアご自身が来られ、そのみもとに引き上げてくださいます。それは半ば強引、無理やりに盗み出すかのようです。これを携拳と呼んでいますが、今日の箇所から読み取るならば携拳される条件は「あなたの名」すなわちイエシュアの御名、イエスとも呼ばれるその御名の力を、悪霊をも屈服させるその御名の権威を知り、これを信じているか、その御名によって祈り求めているかということにあると思われます。しかしそれはもちろん御父が、主イエシュアご自身がその御名をお与えになることによって成立します。イエシュアの御名を与えられ、その御名を呼び、その御名によって祈ることができるこの幸い、特権、神の選びに大いに感謝しましょう。

使徒の働き【新改訳 2017】

4:12 …天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。